

## 長良高校

# 「My Name！」

## ～ The Importance of Being Earnest ～

2018. 12. 23 上演5

舞台は20世紀頃のイギリス。「アーネスト」という偽名を使って恋人グウェンドレンに会いにロンドンに通うジャック。「アーネスト」に憧れているというジャックの従姉妹セシリーに会いたいため、自らもアーネストと名乗り、セシリーに会いに行くジャックの友人アルジャーノン。二組は互いに結婚を約束するが、彼女たちが惚れ込んだのは、彼らの名前だった。かくして二人は「アーネスト」を巡り、ドタバタ劇を繰り広げていくこととなる。

イギリスを舞台とした劇なので、随所に西洋を感じさせる工夫が演技の中に感じられた。裾を上げながら歩くドレス姿の貴婦人や、メイドの厳かな所作などによって、違和感なく観客を西洋の貴族社会へ引き込むことができていた。特にラストの社交ダンスのシーンは、貴族社会の優美さを見事に描ききっていた。しかし、社交ダンスの基本の型がおろそかにされているという意見もあった。またその一方で、観客を変に緊張させることなく、笑える雰囲気を作ることに成功していた。セリフをかぶせて会話をコミカルに見せる表現や体をダイナミックに使った感情表現に加えて、多くのメイドや執事がスキップしながら行う場面転換は、観客をリラックスさせることにおいて特に効果的であった。

衣装は、西洋の世界観を忠実に再現すると同時に、それぞれのキャラクターの個性を際立たせることに役立っていた。メイドのフリルが少なかったことで、よりリアルなメイドを再現できていたという意見もあった。

舞台美術は、ロンドンのアルジャーノン邸、田舎町のセシリー邸の庭、セシリー邸の三場面で構成されており、いずれも白を基調とした舞台装置だった。これらは、登場人物のドレスの色を際立たせると同時に、貴族特有の洗練された気品を観客に印象づけるのに効果的であった。また、パネルにはキャストがついていたり、机は取り外せるようになっていることから、素早く舞台を転換させるための工夫が感じられた。

照明は、舞台がロンドンの時は大黒幕で遮られていた Horizont 幕がセシリー邸の時は開けられていたが、これは、都会の持つモダンさや暗さと、田舎の持つ素朴さや明るさを表現するのに効果的だった。

音響は、明るいクラシック曲を使って前述の場面転換をよりポップにすることに成功していた。また、社交ダンスを踏むラストシーンに優雅な印象を与える点においても効果的であった。

ジャックとアルジャーノンを筆頭とした登場人物のまっすぐな感情表現に、おかしさ、浅はかさを感じると共に、その中の表情の豊かさや素朴さ、なにより人間くささが観客の共感を誘っていた。

我々にとって敷居が高そうな貴族社会を、丁寧かつ優美に描ききると同時に、高校生のエネルギッシュさが伝わってくる、力強い劇だった。